

大学生  
×  
令和の七賢人  
プロジェクト

# 7 KEN JIN





アバンセ館長企画  
大学生×令和の七賢（KEN）人  
プロジェクト誕生秘話



佐賀県立男女共同参画センター・佐賀県立生涯学習センター「アバンセ」は、2025年に、「らしく・あたらしく」のキャッチフレーズのもと開館30周年記念事業を開催しました（※佐賀県DV総合対策センターは20周年）。毎日1000人の方が足を運んでくださるアバンセを、未来のユーザーである若者世代にもっと知ってもらいたい願いが膨らみました。

「そうだ、大学生が主体で制作する、男女共同参画と生涯学習との両方の分野を融合させた、未来志向のインタビュー集を作ろう。佐賀県内で、自分らしく、新しい活動をしている社会人と大学生との出会いを創出しよう！」とひらめきました。

未来予測の困難な時代、筋書き通りにいかない館長企画は、無謀な挑戦と周囲をハラハラさせました。アバンセスタッフばかりでなく、友人・先輩・大学関係者の皆様の力を借りて、企画を練り、公募で10名の大学生が集まりました。ユニークで素敵な個性の集まりに、佐賀県の大学生って頼もしいなと嬉しくなりました。

明治時代に七賢人を輩出した佐賀県。令和の今、それぞれの分野で挑戦し続けている、未来の7KEN人を探そうと提案すると、瞬く間に50名以上の名前が挙がりました。最後は、大学生たちが、「この人に逢いたい！話を聴きたい！」と強く推す七名になりました。それぞれの活動を象徴する「KEN」の字も大学生の命名。インタビューそのものも、斬新な冊子の文章やレイアウトも、大学生プロジェクトメンバーが楽しんで成し遂げてくれました。アバンセスタッフは、企画のサポート、黒子に徹してくれました。ワクワクドキドキを共有してくれて、本当にありがとう。

「佐賀に魅力いっぱいの人たちが生きている。佐賀が好き。」この冊子を手にした人たちが、世代を超えて、佐賀を誇らしく感じてくれたら、アバンセ＝幸せに生きたい県民の応援団の冥利に尽きます。

アバンセ館長 田口香津子



## 荒牧 順子

一般社団法人 SAGA こどもホスピス 代表取締役  
株式会社 ドアーズ 代表取締役

病気や障がいのある子どもと家族の居場所とした  
こどもホスピスの運営・活動に取り組んでいます。

### 活動をする上で大切にしていること

荒牧さんが活動で何より大切にしているのは、「家族全員を一人の『人』として尊重すること」です。医療的ケアが必要な子どもを持つ家族、とりわけお母さんは、病院や施設ではどうしても「ケアの担い手」として見られがちです。しかし荒牧さんは、お母さんを決して役割で呼ばず、名前で呼びかけます。



それは、子どもの病気によって、お母さん自身の人生や「その人らしさ」が置き去りにされないように、という祈りに似た配慮です。お父さん、兄弟、祖父母。誰か一人だけが無理をすることなく、家族全員が自分らしく安心して笑える環境を整える。その土台があってこそ、子ども自身の笑顔に繋がるのだと、荒牧さんは信じています。

# 献

患者さんと家族に  
全力貢献！

## 活動の中で思い出に残っていること

活動の中で最も印象に残っているのは、佐賀ブルーナースの試合にお子さんと家族を招待したときのことです。

重い医療的ケアが必要な子を持つ家族にとって、外出は命がけの準備を伴うハードな挑戦です。しかし、試合後に届いたのは「何年ぶりに無心で楽しめました」というお母さんからの言葉でした。そのご家族はその後、自ら何度も会場へ足を運ぶようになり、今では地域の人たちと自然な挨拶を交わす関係が生まれています。

「支援される存在」としてではなく、「地域の中で普通に過ごせる存在」へ。スポーツ観戦という一つのきっかけが、孤立していた家族と社会を再び結びつけた瞬間だったそうです。

モットーは「限界突破」。

## 働く家族を守る次なるチャレンジ

荒牧さんの情熱は、子育てや介護と仕事の両立という「ビジネスケア」の領域へと広がっています。

「ケアのために仕事を辞めざるを得ないお母さんをなくしたい」。その思いから、現在は企業と個人の間立ち、オンライン相談や勤務形態の調整をサポートする、新たなビジネスモデルの構築にも挑んでいます。看護師という入り口から見てきた社会の課題に対し、自ら「限界突破」して解決策を形にしていこうと決意しました。

「社会的弱者と呼ばれる方々が豊かに暮らせる社会は、きっとすべての人にとって優しい社会になる」その確信を胸に、荒牧さんは今日も、一家族一家族の「自分らしさ」を守るための冒険を続けています。



佐賀のどこにいても、

つながりを感じられる未来へ

佐賀市中心部には支援が整いつつありますが、一歩外へ目を向けると、地域による支援の格差や、同じ境遇の仲間に出会えない「孤立」という課題が見えてきます。

荒牧さんは、スポーツに限らず、病気や障害の度合いに関わらず誰もが参加できる「つながりの場」を県内各地に広げていきたいと考えています。医療職だけでなく、地域の人々が当たり前前にケアの現状を知り、ご家族と会話を交わす。そんな「心の距離が近い地域」を作ることが、今の荒牧さんの大きな目標です。





## 甲斐瑠夏

佐賀トライアスロンチーム TRISE 所属  
トライアスロン競技プレイングコーチ

### 活動をする上で大切にしていること

「プレイングコーチ」という選手とコーチを同時に行なっている独自のスタイルを貫く甲斐さんが、指導の現場で最も大切にしているのは、「全員を絶対に見捨てないこと」です。練習中、どんなに人数が多くても必ず一人ひとりに声をかけます。それは、「自分が教えたいこと」を押し付けるのではなく、「相手が何を教えてもらいたいか」を常に想像するため。動画を撮ってフォームを分析し、一人ひとりの成長を丁寧にフィードバックする——。その真摯な姿勢の根底には、プロとして競技を続けているからこそ生まれる、揺るぎない説得力が宿っています。「引き締まった体で現役として戦っているコーチの方が、子供たちも『あんなふうになりたい』と信じてくれますよね」と笑う甲斐さん。競技者としての背中を見せ続けることが、甲斐さんなりの最高の指導法なのです。



### 活動の中で思い出に残っていること

活動の中で最も印象に残っているのは、実は競技の結果以上に、佐賀という土地に「自分の居場所」ができていった過程そのものだそうです。大学卒業直前、わずか2週間で決まった佐賀への移住。知り合いは一人もいませんでしたが、不安よりも「何でもできる!」というワクワク

# 懸

スポーツに懸け、  
佐賀を元気に

が勝っていたそうです。水泳部、陸上チーム、さらにはプロの自転車選手……。競技の垣根を超えて自ら飛び込み、共に汗を流す中で、驚くほどの速さで仲間が増えているそうです。

国スポを「一過性のイベント」ではなく、その後の人生の「中間地点」と捉える佐賀県の温かいサポート、そして山口知事の姿勢に感銘を受け、「ここで永住する」と決めたそうです。今では、初心者が完泳を果たしたり、教え子が国スポに出場したりする姿を見ることが、甲斐さんにとって何よりの喜びとなっています。



## 佐賀を「日本一の聖地」へ！

### 九州を動かす壮大なビジョン

「佐賀県は、実はトライアスロンにとって日本一の練習環境なんです」と甲斐さんは断言します。世界基準のプール、信号の少ない道路、素晴らしい競技場。しかし、環境はあっても「教える人」がいない——。そんな九州全体の課題を解決するため、「トライズ」の活動をさらに加速させています。目指すのは、ジュニア世代からシニアまでが、この素晴らしい環境を使い倒せる仕組み作り。そして、スポーツの普及がそのままビジネスとして次世代に繋がっていくモデルの構築です。「やらない後悔より、やってみる後悔」。そんな哲学を胸に、2026年からはジュニア向けの練習会も本格始動します。一人のアスリートが佐賀で見つけた「冒険」は、今、地域全体を巻き込む大きなうねりへと変わろうとしています。



## 才能を超える「努力の設計図」

### —トライアスロンの真の魅力—

甲斐さんがトライアスロンに魅了される理由は、この競技が「努力が才能を凌駕する」世界だからです。

「水泳などの短距離は、生まれ持ったポテンシャルが大きく影響しますが、2時間を超えるトライアスロンは、経験値と戦略がモノを言います」。コースの状態や風向き、相手との駆け引き。刻一刻と変わる状況を読み解き、自分の得意をどうハメ込むか。その緻密な戦略性があるからこそ、コツコツと積み上げた努力が、時として天性の才能さえも追い越していく。その「大逆転」の可能性に夢中なのだそうです。



# 下津浦 公

下津浦法律事務所弁護士  
特定非営利活動法人佐賀子ども支援の輪 理事長



「佐賀 子どもシェルター ばるーん」とは、虐待、非行、貧困など様々な理由で居場所を失った女の子(13~20歳)が、安心して暮らせる場所を提供して自立に向けた支援を実施しています。

下津浦さんは、佐賀県神埼市に事務所を構える弁護士として活動する一方で、子どもシェルターの立ち上げと運営にも携わっています。子どもシェルターでは未成年を保護する際、保護者への連絡が必要となり、その第一報を下津浦さんが担うことも多いです。冷静に受け止める保護者がいる一方で、約三~四割は反発を示すそうです。児童相談所の一時保護が国家権力に基づくのに対し、民間の子どもシェルターは本人の意思による滞在で、法的にはホテルや友人宅に近い位置づけにあります。しかし、虐待の有無が明確でなくとも「命を守るための逃避」は正当防衛や緊急避難に該当し得ると考え、リスクを覚悟した上で運営していると語りました。

## これまでの活動の中で

### 印象に残っていること



シェルターにいた当時十八歳の女子から暴力を受けた経験が、強く心に残っています。その行動の裏には、言葉にならない「助けて」という思いがあったと感じています。

# 権

子どもの権利を  
守り抜く

## 活動をする上で大切にしていること

下津浦さんが最も重視しているのは、子どもの声や思いを丁寧に聴き、寄り添う姿勢です。現場のスタッフは24時間の共同生活の中で、夜中に2～3時間話をすることもあり、子どもが「今なら話せる」と感じた瞬間を逃さない体制があります。会話だけでなく、料理や食事、片付けなどの日常を共に過ごすことで、言葉にならない本心を行動から汲み取ろうとしています。

— 弁護士だからこそ、居場所をつくれる —  
弁護士業務で未成年案件を扱う中、他地域で弁護士が子どもシェルターを運営している事例に触れ、弁護士でも子どもの居場所をつくれると感じたことがきっかけでした。立ち上げ当初は弁護士仲間からの支援を受け、現在の運営メンバーも過半数が弁護士です。制度からこぼれ落ちる子どもたちを可視化し、公的仕組みの拡充につなげる点に、弁護士が関わる意義があると述べました。



— 罰する前に、背景を —  
厳罰化の流れを「時代に逆行している」と批判し、排除ではなく背景に目を向ける重要性を訴えました。

## これからどうしていきたいか

見過ごされがちな子どもたちを社会に示し、制度が育つための「肥やし」になりたいと語ります。現場の実情を起点に法律や制度が変わることを期待し、そのためには連動的な取り組みが必要だと述べました。

— 「一人ひとり」に向き合えない社会の現実 —  
社会全体に余裕がなく、一人ひとりに十分向き合えない現状があります。子どもの事情は十人十色ですが、社会の仕組みがそれに追いついていないと感じています。

## 学生へのメッセージ

職業名だけで将来を考えるのではなく、その先のルートまで想像すると人生はより面白くなると学生に伝えたいと語っていただきました。





## 竹下 真由

竹下製菓株式会社 代表取締役社長

### 活動をする上で大切にしていること

日々、分刻みのスケジュールで会議や打ち合わせをこなす竹下さん。そんな竹下さんが経営のハンドルを切る際、最も大切にしているのは、「その仕事は人を幸せにし、楽しませることが出来るか？」という非常にシンプルな問いです。

「たとえ大変なことでも、自分たちがワクワクして、思い入れを持てるものでなければやり遂げることは難しい」と語る竹下さん。その原点は、工場の敷地内で育ち、近所の友達が自社のお菓子を「おいしい！」と頬張る姿を間近に見てきた幼少期にあります。

そんな竹下さんが今、大切にしているのは、子どもの送り迎えの時間。どんなに忙しくても、子どもと一対一で向き合い、対話するひとときが、経営者としての顔から一人の母親へと戻り、心を整える貴重な時間となっています。

### 活動の中で思い出に残っていること

活動の中で特に印象深いエピソードとして語られたのが、前代未聞の「スペースモンブランプロジェクト」です。「いつか宇宙から地球を見てみたい」という竹下さん自身の夢が、テレビで見たぬいぐるみの打ち上げ風景と重なり、「ブラックモンブランなら、私より先に宇宙へ行けるかも！」というユニークな挑戦に繋がりました。

一見すると突飛なアイデアですが、そこには若者への温かなメッセージが込められています。「学校での学びや技術が、どうやってビジネスや夢に繋がっていくのか。大人が真剣に遊ぶ姿を通じて、科学や未来を身近に感じてほしい」大空へ、そして宇宙へと向かうアイスの姿は、まさに竹下製菓の「楽しませる」という精神を体現した象徴的な物語となりました。

# 研

心がワクワクする  
幸せを研ぎ澄ます

カプセル食になってもいい。

## 「おいしさのデータ」を売る柔軟性

製品づくりにおいて、竹下さんは驚くほど柔軟です。「美味しいもので人を幸せにする」という理念さえ揺るがなければ、形にはこだわりません。「もし将来、食事がカプセルやデータで摂取される時代が来ても、それが喜びなら、うちは『おいしさのデータ』を売っているかもしれません」創業以来、時代のニーズに合わせて姿を変えてきた歴史があるからこそ、固定観念に縛られない強さがあります。10年後、日本中、そして世界中で「ブラックモンブランが買える」未来を目指しながらも、時代の波を軽やかに乗りこなそうとする姿勢が印象的でした。



## 「ポジティブ思考」が未来を拓く、

### 佐賀で暮らす新しい幸福のカタチ

佐賀の未来を担う若者たちへ、竹下さんは「温故知新」と「ポジティブ思考」の大切さを説きます。先人の知恵を学びつつ、自分たちの新しい感性を自由に伸ばしてほしい。そして、失敗さえも「次の一步」と捉える前向きさが、これからの時代を生き抜く力になると信じています。

「都会と同じ尺度で幸せを測る必要はありません。佐賀の豊かな自然の中で暮らし、リモートワークでやりたい仕事をする。そんな『佐賀らしさ』を活かした発展こそが理想です」と語っていただきました。



「全員野球」で育児と仕事を両立させながら、海の中でのデジタルデトックスでリフレッシュする。そんな自然体のリーダー像は、次世代の若者たちに「こんな大人になりたい」と思わせる、確かな希望の光となっていました。

※当プロジェクトは、e-kagaku 国際科学教育協会と、東京女子学園・芝国際中学校・高等学校との共同プロジェクトです。



## 野中 一矢

FoodStock 株式会社 代表取締役

「銘店の味アーカイブ」を通じて、飲食店の味を  
未来に残す取り組みを行っています。

### これまでの活動の中で

#### 印象に残っていること

特に印象に残っているのは、「銘店の味アーカイブ」プロジェクトにおける佐賀ラーメンの商品化への挑戦です。コロナ禍で飲食店が次々と閉店する中、店主の技術や味を残したいという思いから、味をデジタル化し収益につなげる仕組みづくりに取り組みました。

佐賀の老舗ラーメン屋と進めたレトルト化では、大量生産の過程で油分の分離や味のぼらつきが生じ、全商品返金という判断に至りましたが、事業の難しさと挑戦し続ける重要性を実感した経験だったと語っていただきました。



### 活動する上で大切にしていること

野中さんは、「やりたいことファーストで動くこと」を大切にしています。

思いだけでは事業は続かず、自立できるビジネスモデルをつくるのが重要だと考えていました。

また、完璧を待たず直感を信じて行動する姿勢を重視しており、「出航のタイミングを待っていたら船は出せない」という言葉にその考えが表れています。

# 拳

拳に込める、  
大きな決意

## 銘店の味を未来へ



「銘店の味アーカイブ」は、フードストックを活用し、飲食店の味やレシピをデジタル化して保存・活用するプロジェクトです。調理を止めると売り上げがゼロになるという飲食店の課題に対し、閉店後も味の価値を残し、収益につなげることを目的としています。

## 何もせず後悔しなくなかった。

起業のきっかけは東日本大震災です。被災地出身者から身近な人を亡くした話を聞き、「何もせず後悔したくない」と強く感じたそうです。その後も多くの壁に直面しましたが、自分が生きていけるか、事業として成立するかを考え続け、現実的な仕組みづくりを重視してきたと語っていただきました。



## AI 活用の重要性と、世界を見る力

AIは「使わない日はない」と言うほど活用しており、仕様を伝えるだけでコードやデザインが生成される現在に、大きな変化を感じていると話してくださいました。

AIを使うかどうかで今後の差は広がると強調されました。

また学生に対しては海外経験の重要性を強調し、世界を見た上で日本を選ぶ視点、特にアジア以外の国に赴き、知ることの大切さを語っていただきました。



## 学生へのメッセージ

野中さんは最後に、これから社会に出ていく学生たちへ向けて次のようにメッセージを送りました。「やりたいことがあるなら、まずは船を出してみしてほしい。完璧な準備や正解を待っていたら、何も始まらない。特に若いうちは、周りに流されず、自分の時間を使ってたくさん挑戦してほしい。チャレンジし続けることが、きっと未来につながる。」



## 藤 直道

株式会社ドリームクエスト代表取締役

### 活動をする上で大切にしていること

取材を通じて何度も耳にしたのは、「大人にこそ、本気で遊んでほしい」という、いたずらっぽくも熱い想いです。日々の仕事や家事で忙しい大人たちが、その日だけは一人の「主人公」として、仲間と共に街を駆け回る。そんな非日常を届けるために、このゲームは作られています。

あえて設定された「クリア率3割」というちょっと厳しい難易度も、すべては大人たちの本気を引き出すためのスパイス。知恵を絞り、必死に手を組んで強敵に挑むとき、みんなの瞳はまるで子供の頃のようにキラキラと輝き始めます。ただのイベントではなく、大人たちが心の底からワクワクできる「居場所」を作ること。それが、藤さんが何よりも大切にしている信念です。



### これまでの活動の中で印象に残っていること

これまでで特に印象に残っているのは、イベント開催日が雨予報だった時のこと。普通なら「残念な日」で終わってしまうはずが、参加者の皆さんは「思い出に残る冒険になった」とおっしゃっていました。皆さん、びしょ濡れになりながらも笑顔で魔王討伐に向かっていました。実は私もこのイベントに参加していたのですが泥んこになりながら仲間と笑い合い、ピンチを乗り越えたあの日の達成感は、予定調和な日常では決して味わえないものでした。ハプニングさえも味方につけて、その日、その場所でしか生まれたい「自分たちだけの物語」が紡がれていく。そんな奇跡のような瞬間を目の当たりにするたび、この活動を続けていて本当によかったと感じるそうです。

# 険

大人も子どもも  
巻き込む冒険家

## 何気ない会話がゲームを進める

このゲームの面白いところは、スマホの画面ばかりを見てはクリアできない点です。攻略の鍵を握るのは、「街の人との何気ない会話」。村人役の地元のお兄さんや商店街の店主に自分から話しかけることで、物語の扉が開いていくそうです。最初は少し照れていた参加者も、ヒントをもらううちに会話が弾み、いつの間にか街の方々と仲良くなっていることも。台本通りのセリフだけじゃない、人間味あふれるアドリブや温かい交流。そんな「一期一会」の出会いがあるからこそ、ただの通り道だったはずの街角が、忘れられない思い出の場所へと変わっていくのです。



## 地域の「宝物」を物語に。日本中をワクワクの舞台へ

イベントのシナリオは、すべてその土地に眠る歴史や文化を丁寧にすくい上げて作られています。五島列島のクジラの歴史や、別府の温泉街の迷路のような路地。それらをファンタジーの世界観に落とし込むことで、参加者は遊びながら自然とその街のファンになっていきます。

「歴史をエンタメで体験する」ことで、その土地をもっと知ってもらいたい、そんな思いから生



まれたこの活動は各地の面白い人たちを巻き込みながら、「本気で遊ぶ大人」を増やしていく。次はあなたの街が、冒険の舞台になるかもしれません。

# 三田 かおり

株式会社 Retocos 代表取締役



三田かおりさんは、佐賀県の離島に眠る未利用資源を活かし、プロダクト開発を行っています。事業当初は、島で採れる椿を中心とした原料をメーカーへ供給することに注力していましたが、現在はハンドソープやお香、化粧品などの最終商品を自社で開発・製造することに力を入れています。

原料として渡すだけでなく、「自分たちの想いや背景まで含めて、使う人に届けたい」という考えから、最終消費者と直接つながる形を選びました。島の植物やハーブを練り込み、伝統的なお香文化に新しい視点を加えたプロダクトは、現代の暮らしに自然と溶け込む存在となっています。

## これまでの活動の中で印象に残っていること



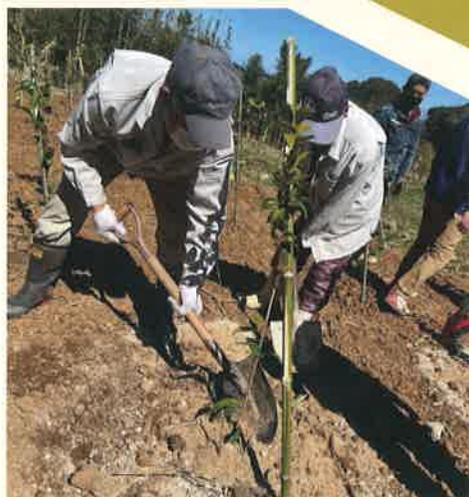
印象に残っているのは、「量ではなく質で勝負する」と決めた瞬間です。日本の椿オイル市場では後発だったため、大量生産を目指すのではなく、品質に徹底的にこだわるという戦略を選びました。島で採れる椿は量こそ多くありません。しかし、それを弱みと捉えるのではなく、希少性やトレーサビリティの高さという価値として伝えていくことを大切にしました。不純物の混ざらないヤブツバキから採れる、オレイン酸含有率の高いオイル。その価値をどう伝えるかを考え抜いた経験は、現在のブランドづくりの基盤となっています。

# 顕

ニューなことへの  
感心を顕し進め！

## 活動をする上で大切にしていること

三田さんが活動の中で大切にしているのは、「自分軸」を持つことです。事業を始めた当初は、「島のため」「地域活性化のため」という想いが強くありました。活動を続ける中で、地域にはそれぞれの暮らしや考え方があることを学び、その視点に触れることは大きな気づきとなりました。その経験を通して、「誰かのため」という想いに加え、「自分は何をつくりたいのか」「どうありたいのか」という軸を持つことの大切さを実感しました。自分の軸が定まることで迷いが減り、事業の方向性も少しずつ明確になっていきました。失敗を恐れすぎず、小さな挑戦と改善を重ねていくことを大切にしています。



お香は、古代より海と陸の交易によって世界を巡り、日本では独自の香文化として磨かれてきました。その歴史の流れを受け継ぎながら、日本の香りを新しいかたちで世界へ届けていきたいと考えています。

事業を続けていくことで、結果的に佐賀の素材や地域の魅力が世界へと広がっていく。そんな未来をつくっていききたいと考えています。

## これからどうしていきたいか

これから目指しているのは、「佐賀発」ととどまらない、日本発のブランドを世界へ届けることです。まずはプロダクトとブランドそのものの力を高め、純粋に「良いもの」として選ばれる存在になること。その先で、「実は佐賀の素材から生まれている」と知ってもらえるような広がり方を描いています。

現在は海外での商品展開も計画しています。



## アバンセ館長企画 学生メンバー紹介



### 尾辻 恋

佐賀大学芸術地域デザイン学部2年  
プロジェクトマネージャー / 野中さんのインタビュー

異なる大学のメンバーとの連携は初めてで大きな挑戦で、その分1回1回の会議を大切に進めてきました。順調とは言えない進行で、学生メンバーやアバンセスタッフの皆さんにご迷惑をおかけしましたが、その分学びも多い経験でした。無事にこの冊子を形にできた喜びを強く感じています。

### 田中 夢唯

佐賀大学芸術地域デザイン学部2年  
デザイナー / 三田さんのインタビュー

冊子全体の構成設計から誌面デザイン、レイアウト調整、最終入稿データの作成までを主に担当しました。情報を整理しながら一冊としての統一感を保つ事は難しかったですが、デザインについて学べた機会だったと思います。

## 本間遼平

佐賀大学芸術地域デザイン学部 3年  
ライター / 甲斐さん・藤さんのインタビュー

佐賀の七賢人プロジェクトに関わることができ、自分もたくさんの刺激を受けることができました。たくさんの取り組みや面白い大人に出会うことで自分自身の選択肢が増え、将来についてよく考えるきっかけになりました。自分が佐賀の将来の七賢人になれるようこれからも頑張ります。

## 高田 凜

佐賀大学教育学部 2年  
インタビュー調整担当 / 下津浦さんのインタビュー

法制度と現実の間に存在するギャップに向き合い、子どもたちを守ろうという覚悟が伝わってくる対談でした。記事を通じて、活動の背景にある想いや空気感が少しでも伝われば幸いです。

## 赤木千咲

西九州大学健康栄養学部 2年  
ライター

様々な分野で挑戦を続ける方々の姿に触れ、一人ひとりの想いが佐賀の力になっていると感じました。この冊子が、何かに挑戦するきっかけになれば嬉しいです。

## 山口みひろ

西九州大学健康栄養学部 2年  
デザイナー

この企画で七賢人の方の生き方や想いに触れ、自分の将来を考えるきっかけにもなりました。地域の魅力を発信でき、人と人とのつながりの大切さを実感できた活動でした。

## 高柳 光

佐賀大学教育学部 4年  
会計補助 / 竹下さんのインタビュー

この企画を通して、様々な分野で活躍されている方々のお話を伺うことができ、新たな学びや発見が多くありました。また、直接インタビューを行うことで、その難しさを実感しました。この冊子を通して、7名それぞれの歩みや思い、その魅力をぜひ感じていただきたいです。

## 國嶋元乃

西九州大学看護学部 2年  
SNS 広報担当 / 荒牧さんのインタビュー

普段出会えない方のお話を聞き、新しい世界を知りたいと思い参加しました。今回の対談を通して、視野や知識を広げることが出来たのでこれからの自分の成長につなげられるよう努力します！

## 原田柚季

西九州大学健康栄養学部 2年  
SNS / 広報担当

冊子を通して多様な価値観や経験が伝わるよう、視点を意識して人選しました。いろいろな方のリアルな声が誰かの一步を踏み出すきっかけになれば嬉しいです。

## 今泉大雅

佐賀大学教育学部 4年  
記録

本誌をご覧いただきありがとうございます。佐賀のこれらを担ってくださる7名と関わる中で、私自身の郷土愛や将来への期待感をより大きなものにすることができました。読んでいただいた方にも是非感じていただけると嬉しいです。

## 発行・企画

佐賀県立男女共同参画センター / 佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）

840 - 0815 佐賀県佐賀市天神三丁目 2 - 11

TEL 0952 - 26 - 0011

FAX 0952 - 25 - 5591

E-mail [daihyo@avance.or.jp](mailto:daihyo@avance.or.jp) Web <https://www.avance.or.jp/>



ホームページはこちらのQR  
コードからでもご覧になれます